

JSTA 日本熱帯農業学会

熱帯農業研究

第5巻 別号2

日本熱帯農業学会第112回講演会

- I. 研究発表要旨
- II. シンポジウム要旨



会場 名古屋大学大学院生命農学研究科
および野依記念学術交流館

2012年10月6日, 7日

東ヒマラヤのチベット系民族の農耕社会文化とその文明的意義

安藤和雄 (京都大学東南アジア研究所)

キーワード: 東ヒマラヤ、ブータン、アルナーチャルプラデーシュ、農耕社会文化、チベット系民族

Agricultural based societies and cultures of people of Tibet language groups in the eastern Himalaya
and the significance as a civilization

Kazuo Ando, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Key Words: Eastern Himalaya, Bhutan, Arunachal Pradesh, Agricultural based Societies and Cultures,
People of Tibet cultural groups

1. はじめに: 研究目的と背景

東ヒマラヤがどの地域を指し示しているのかに明確な定義はないが、Wikipedia の英語版では、Eastern Himalaya の範囲は、シッキムからブータンを経てインド東北部のアルナーチャルプラデーシュ州である。しかし、水源で地域を区切った場合、エーヤワディ川までがヒマラヤ山脈を水源とすることから、ミャンマー北部までを東ヒマラヤに含めることが妥当であろう。東ヒマラヤ地域の問題は、英領時代から今日まで、インド、ミャンマー、とブータンと中国の間で国境紛争が起きてきた点にある。したがって、東ヒマラヤのもっとも中核となる東ブータン、アルナーチャルプラデーシュ州、ミャンマー北部は、2000 年前後まで外国人や同国人でさえも自由に訪問できる地域ではなかった。そのため、「隠された土地、隠されたヒマラヤ地域」とも呼ばれてきた。近代化の影響は限定的で、現在でも伝統文化や価値観に依拠した暮らしと社会システムが濃厚に残されている。一方、現在、近代化と呼ばれる西洋文明の波及による様々な問題が指摘されて久しいが、筆者は、この問題に取り組むためには、もう一度西洋文明に影響される以前の「地域に根ざした文明」の意義を問うべきではないかという考えをもっている。特に 2007 年以降に総合地球環境学研究所のプロジェクト「人の生老病死と高所環境 - 「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応」(奥宮清人代表)に参加し、アルナーチャルプラデーシュ州のウエストカメン県とブータン東部のタシガン県で、農耕民と牧畜民の村々を訪問するようになり、この考えが強くなった。本プロジェクトの目的も「高地文明」という新しい文明の定義を検討することでもあり、筆者は、上記の地域が育んできた農耕社会文化の文明的意義を考察してきた。本報告では途中経過であるが、調査地で得られた農耕社会文化の事実に基づいて筆者が考えている文明論について若干言及してみたい。

2. 調査地域と調査方法

調査地域では、ウエストカメン県のモンパ語を話すモンパ族とブロックパ語を話すブロックパ族、そして、タシガン県のシャルチョッパ語を話すシャルチョッパ族とブロックパ族の村々で、聞き取りと観察のため、1 回の滞在が 2 週間前後という短期調査を年に数回繰り返した。モンパ語、ブロックパ語、シャルチョッパ語は、言語的にはチベット-ビルマ語派に属し、チベット仏教とボン教を背景としたチベット系の文化が人々の暮らしや社会を支えている。モンパ族とブロックパ族はチベット仏教のゲルク派であるが、シャルチョッパ族はニンマ派で異なっている。しかし、言語的にはシャルチョッパ語とウエストカメン県のモンパ語がよく似ているといわれている。1914 年の Kennedy 大尉の報告書によれば、ウエストカメン県の西境となる標高 4000m のセラ峠から東側の地域のウエストカメン県のモンパ族は、シャルチョッパ(東の人という意味もある)と呼ばれていたという (Chowdhury 1996: 39)。アルナーチャルプラデーシュ州では 2007 年~2011 年にかけて、ブータンでは 2010 年と 2011 年に調査を行った。調査は、英語もしくは簡単なヒンズー語を使用し、それぞれの地域で現地語である上記の言語に通訳(大学生もしくはガイド)を介して翻訳して行った。しかし、現地名などの英語や日本語の表記については、著者が聞き取ったものであり、通訳が筆記したものではない。

3. 調査結果と考察

東ヒマラヤのチベット系の文化をもった人々の農耕文化社会の特徴は、農耕民と牧畜民がトウモロコシや米などの穀物とチーズ、バターなどを特定の間人関係において物々交換してきた交易社会ネットワークの形成にあるといえる。筆者らは、これをモンパ・モデルと呼んだ(安藤ら 2011)(図 1 参照)。このモデルの特徴として、ウエストカメン県、タシガン県に関わらずして、ブロックパ族は、

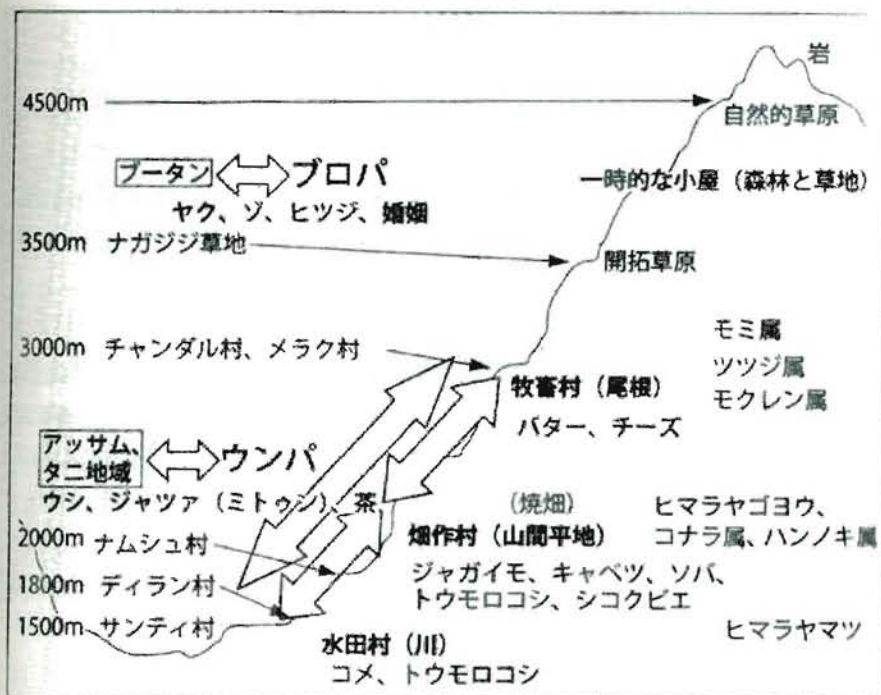


図1 アルナーチャル・プラデシュのディラング郡における交易社会ネットワーク(モンパ・モデル)(安藤 2011より)

標高 3000m 前後に定着村をもち、夏には 4000m の標高の草地で、冬には 2000m~2500m の標高の森林でヤクやヤクと高地牛のハイブリッドであるゾー(オス)、ゾモ(メス)などの放牧と飼育飼育を行い、耕作は定着村の菜園で行うのみである。モンパ族とシャルチョッパ族は、2000m~1500m の標高にある水田、常畑で、稲、トウモロコシ、ソバ、シコクビエ、野菜などを栽培している。これ

が主な生業となっている。ただし、農業以外の雇用機会や出稼ぎも増えつつある。ブロックパ族は常設店で購入する比率が増えつつあるが、基本的な主食となる穀類をモンパ族やシャルチョッパ族に伝統的に依存してきた。しかし、モンパ族やシャルチョッパ族にも伝統的に牧畜を生業とする人たちがいる。タシガン県のメラックとサクテンはブロックパ族の人口がもっとも多い地区である。彼らは、女神アマジョモ伝承をもち、7世紀に女神のお告げに従い、チベットのツナ (Tshona) から移住してきたと言われている (Chand 2004:36)。一方、モンパ族やシャルチョッパ族には、明確な伝承が残されていない。このことから、モンパ族とシャルチョッパ族は先住者であったことが分かる。この特別な関係をナッチャンという。ナッチャンの意味は、特別に世話をする人というくらいの意味であるようだ。モンパ・モデルは東ヒマラヤの文明の核心であると筆者は見なしている。幕末から明治に來日した欧米人の日本文化見聞記録を検討した渡辺京二『逝きし世の面影』(平凡社 2009<2009>:10-71)によれば、文明とは歴史的個性としての生活総体のありようであるという。したがって、文明は、ある特定のコスモロジーと価値観に支えられた社会構造、習慣と生活様式をもつ。文化や民族の特性は滅びずに変容するが、構造と様式をもつ文明は滅びる、というのである。欧米人は記録の中で、西洋文明の導入により、日本文明の滅亡を危惧し嘆く。筆者ら日本人の世界史的な役割があるとすれば、東ヒマラヤの地域に今も残る「もう一つの文明のあり方」を積極的に評価し、そこから学ぶ姿勢ではないだろうか。幕末から明治に來日した欧米人は西洋文明の優位性を誇示するばかりであった、その轍を踏むべきではない。現在の世界の文明が Civilization という単数形だけではなく、Civilizations という複数形として存在している事実(ブローデル 2000<1995>:35-37)を、東ヒマラヤの「高地文明」はいみじくも筆者に語りかけているのである。

4. 参考文献

- 安藤和雄ら 2011 「東ヒマラヤの憧れの地、アルナーチャル・プラデーシュ」『生老病死のエコロジー』奥宮清人編 昭和堂。
- Chowdhury, J.N. 1996 Arunachal Panorama, Director of Research, Arunachal Pradesh.
- Chand, R. 2004 Brokpa, PAHAR.
- ブローデル, フェルナン 2000<1995> 『文明の文法 Ⅰ』(松本雅弘 訳) みすず書房:35-37.

Japanese Society for Tropical Agriculture

***Research for
Tropical Agriculture***

Vol. 5, Extra issue 2



October 6, 7 2012